

英語教育から見たイギリスの生活と言語

櫛 本 英 彦

1 気 候

7 8 月は日本（中部）の10月前半の気候で、日中の気温は20°~24°が一般的である。夜9時過ぎになって暗くなり始める。概して大陸の諸国より気温は低く、曇天と雨が多い。今晴れているかと思えばすぐ雲が広がって雨が降り出し、又すぐに晴間がのぞく、という変化の多い天気である。スコットランドでは8月中旬に朝晩は暖房を入れていた。

2 ロンドンの概観

新旧混在するという点は他の国の諸都市と同様である。30階程の高層建築は東京より多く、100以上はロンドン全市で数えられると思う。8~10階程度の新しい建物も多いが、これらの多くは外装が煉瓦であるため、他の建物との調和が保たれている。殆どの場所で私達が少年時代に写真で見た通りの風景がそのまま見られる。しかし建物の内部は近代化されているし、外壁のよごれ落しの行われた建物も多い。City の戦災地 Barbican 地域には全く新しい構想による市街地が形造られつつあり、ここにはオフィスばかりでなく、フラット（アパート）、商店、劇場、集会所、学校、緑地等が計画的に配置されている。

広大な数多くの公園の他、何々 Square と呼ばれる緑地、又10メートルを越す樹路樹等緑の環境がよく保たれている一方、空は晴れると真青で、いわゆる公害というものの存在は直接感じられない。

居住地と勤め先である事務所や工場を統一したニュータウンは大変有名であるが、ロンドン周辺にいくつか建設されている。その中では人と車の分離が行なわれ、特に商店街では買物客は完全に車と関係なく行き来できるようになっている。より現代的な計画に基づくニュータウンが現在いくつか計画されているとの事である。

3 地方の概観

地方の諸都市は概して美しく保たれている。田園地帯は小麦畑に牧場の点在する丘のいわゆる典型的イングランド風景が広がっていて、地方的変化は少ないように思われる。しかし人口密集地帯に近い程住宅や工場が風景が損なわれている事は他の国々の場合と同じである。

スコットランドに入ると岩石の山々が多くなり、作物が栽培されるよりも、羊の放牧されている所が多い。又イングランドでは建物は煉瓦が多いが、スコットランドでは石造りが多い。

スコットランドはイングランドと行政上別の単位であるため、紙幣も独特のものが発行されており、警官の服装もイングランドのものとは異なっている。

4 通 貨

今年の2月中旬から1ポンド=100ペンスの新しい制度が施行され、10pという風に表示されている。移行は極めて順調で、新旧の混乱はない。なおメートル法も次第に使用され始めている。

5 交 通

鉄道はすべて電気又はディーゼル化され、車両は他のヨーロッパ諸国の物よりやや小型であるが快適である。溶接レールが用いられ速度は極めて速く、日本の列車（新幹線以外）より高速であるとの印象を受けた。不経済線は廃止されて鉄道網は縮小されているが主要都市間の連絡は極めて便利である。

各都市では二階バスが主として使用されているが、一階バスも同様に使用されている。ロンドンでは赤塗の二階バスの他、ワンマンの一階バスも使用され、郊外にはこれらの緑色のものが運行している。新しい設計のワンマンの二階バスが従来のものに漸次置き換えられる機運にある。

他のヨーロッパの諸都市と同様、乗客は乗る際に運転手又は車掌に自分の行き先を言って料金を支払い目的地でそのまま降りる事になっている。

地下鉄は昨年開通した Victoria 線を含め高速で頻繁な運行が行われているが、さらに、二の新線が計画されているとの事である。ラッシュアワーでも立っている人と人との間隔は20～30センチあいている程度である。

タクシーは殆どが新型車になっている。この新型車も外見は旧式に見えるため「イギリスは古い」という事の例としてよく引き合いに出されるが、事實は極めて性能の新しい物である。又背が高いため乗降が便利であり、客席は広く、通りと番地を言うだけで、目的地に正しく連れて行ってくれる。

道路の都市面積に占める割合が大きく4車線、6車線の道路が縦横に通じている他、かなり広い道路にも一方交通が行われているのがよくあり、交通は比較的円滑であるとの印象を受けた。地方にも自動車道はよく発達しているようである。

Traffic Warden という名で、所定の制服を着、交通だけの取締に従事する人々が市内で頻繁に見られる。これらには女性又は中年以上の男性が多いように思われた。

現在ロンドンには Heathrow と Gatwick の二つの空港があり、前者は1,100ヘクタール（羽田は350ヘクタール）で日本からの空路はここを利用する。更に新空港を建設する必要に迫られ、ロンドン北部のある地点が選ばれたが住民の強硬な反対に会い、政府は東部の海岸の Foulness に予定を変更し、現在ここに第三空港の建設が予定されている。

6 社会制度

警官は独特のヘルメットをかぶり、一人又は二人で市内を巡回している。又二人程度小型普通車に乗ってパトロールしているのも見かけられる。武装はしていないが各人襟に小型無線機をはさみ、又ヨーロッパの他の国々の警官と同様個人番号を制服に着けている。

銀行や郵便局では個人名を窓口に掲げて執務している。日本では外国向小包は中央局でしか取扱わないが、ロンドンでは普通の郵便局でも、極めて手軽な形式だけで外国向小包を受け付けていた。ポストの数も日本の場合より多く、手紙が生活に占める重要度を表わしているし、国内向葉書3ペンス、日本向葉書5ペンスのように、外国向郵便は割安である事は海外との関係の密接さを表わしている。郵便番号を書く事、宛名を正しく書く事の宣伝の行なわれているのは日本と同じで郵便車の横に Write it right. の宣伝文句が書いてある。銀行では小さな支店でも外国通貨との両替を行なってくれる。

公衆電話は3分2ペンスであるが、更に2ペンスずつ追加する事により3分ずつ延長して通話できる。

Ambulance は救急車と記されているが、入院又は不自由な人の通院にも予約により使用されている。

7 移 民

黒人、インド人、パキスタン人が多く、大都会程数多く見受けられる。旅行者として接する限りでは交通関係や郵便局の従業員が多いが、スーパーやデパートの店員にも見られる。外面的に見た限りでは人種差別というものは感じられなかったし、交通やデパートの従業員としても親切な人が多かったように思われる。

8 生 活

昔からの大きな住宅の中にはいくつかの部分に内部を区切ってフラットとして使用されているものが多い。これらの内部は近代化され、電化された合所、風呂、水洗便所が各戸に備わり、又湯も水道と共に出るようになっていく。煙を出す暖房が禁止されるにともなって暖房には電気又はセントラルヒーティングが使用されている。又郊外には二戸くっつけて建てられた Semidetached house が一戸建の家や高層アパートと共に数多く見られる。

一般に住宅は住人の名前を表札として出さず、番地と、時に屋号を門に書いている。医師だけは門に一辺20センチ程の表札を掲げているが、それ以外に医師、薬局、菓の広告は行なわれていないように思われる。

ケンジントンガーデンズ及びハイドパークは互に隣接しているが、南北1キロメートルに東西2キロメートルの広がりを持つ公園で市の中央のやや西よりにある。その他大小の公園が市中と市外に散在する他、スクエアと呼ばれる緑地が方々に散在している。又街のちょっとした辻、又は歩道にベンチが置かれていて、散歩する老人等の休息する姿がよく見られる。

一般に道路は他のヨーロッパ諸国の都市と同じく必ずしも清潔とは言えない。紙くず、犬の糞が多く、この点日本の道路の方がはるかに清潔である。方々に **Keep Britain tidy.** という広告が見られたが紙くずをそのまま放置する人がよくある。又ハエもいるがこれはヨーロッパ南部へ行くに従って多くなるように思えた。

しかし道路はよく整備されている一方、道路名の表示や各種の掲示等よく徹底しているし、地下鉄の系統案内やバス停のバス系統表示もよく整備され、くわしく系統の書かれた無料地図とあいまって、行道するのに割合便利である。

1時間程外にいれば1回又は2回自動車の警笛を聞く程度で、バスの警笛、街頭放送、公共の場所でのテレビ等もなく街は概して静かで、又けばけばしい広告も少なく外部からのいろんな刺激で心を掻き乱される事は少ないといえる。

交通マナーは日本よりややよい程度のように思えるが幼児を連れた人や老人には車は非常に譲歩的のように見うけられた。

歩行者が信号の如何にかかわらず、随時横断する点は日本と異っている。方々に subway が作られているが、これはイギリス英語で横断地下道の意味であり、横断陸橋は郊外に一、二見られただけで、市中では subway が作られている。

英国での交通事故死数は日本の半分であり、人口比からすれば同率であるが、車と道路の普及の割合からすると、日本より率が低く、ヨーロッパの他の国によりも低いとの事である。

市民の道徳は見知らぬ人同志の間のエチケットという点では日本より高く、又他のヨーロッパ諸国よりも高いと思われた。バスの乗車、郵便局の窓口は勿論、ちょっとした店、八百屋の買物に至るまで queue (列) を作って順番を待つという事がごく自然に行なわれている。

Thank you. Sorry. Excuse me. 等の言葉も頻繁に使われてる。又子供に対しても、人におつかったり、触れたりしない、人のいる所で大声を出さない、Thank you 等必ず言う、等のしつけがよく行き届いているように感じられた。犬もしつけが行き届いており、人に危険を感じさせるものは皆無と言ってよい。

浮浪者、物乞の姿はロンドン、パリのような大都会では時たま見かけられる。又家屋に侵入するこそども皆無とは言えない。しかしロンドンは夜間でも安全に外出でき、女性でも不安を感じずに外出できる所と言われている。

スーパーマーケットの発達していることは日本と大差ない。小型の買物車を引っぱって買物に出かける女性の姿は住宅地でよく見かける光景である。デパートには日本と同形式のものもあるが、中には各売場が独立した部屋でそれぞれが一つの商店のような感じのものもある。日曜日にはすべての店が閉まるが、chemist だけは輪番により開いているものがある。

なお chemist は調剤をする他、化粧品、ちょっとした日用品も売っている。又日曜には鉄道、バスも回数がへらされ、平日とは別の時刻表で運行される。

服装は一般に日本と大差ないかあるいはもっと自由なように思われるが、気温が概して低いので、商店には日本の合・夏物にあたるものと同時に真冬に着る物が売られている。又同じ日でも上衣を着た人、シャツ姿の人、合オーバーを着た人等他人にかまう事なく各自が自分に合った服装をしている。日本では真冬に着る厚手のセーターやアノラックを7、8月に着ている人もある。

9 新と旧という事について

ヨーロッパの他の国々と比較して、イギリスだけが特に古いという印象は得られなかった。古いという点ではヨーロッパはどこも共通であり、又、それと同時に近代化が行なわれているという点でも、どの国も共通である。

我が国には明治以降外来文化として欧米のものがとり入れられ、その場合にはどうしても、科学的、合理的、現代的なものが主として取り入れられて来ている。この分野だけと、伝統を軸にして徐々に進化して来たヨーロッパのものを比較すると「ヨーロッパは古い」という結論が生れる。しかしこの場合、我々は日本の伝統的な部分は論外として比較の場合に考えに入れていないのではないだろうか。あるいはあまりに無意識になっていて考えに入らないのかも知れない。

総合的に見るなら、新・旧という点では日本とイギリスはじめヨーロッパは同程度と言えるし、特に人間関係、社会組織においては日本には近代以前のものが多く残存しているのではないか。

イギリス始めヨーロッパ諸国では、古いものがそのまま、現代生活に合うよう改造されて使用されているか、又は現実の要求に全く合わない場合には新しいものに置きかえられるかしているし、環境として必要であり又観光的に実利をとまうと考えられる物は古い姿のまま保存するよう努力がはらわれているとの印象を受けた。

10 国民と国民性

欧米人は背が高いという日本人一般の抱いている考えに反し、ヨーロッパ人にはさほど背の高くない人々の多いのが目立つ。イギリスでも、170~180センチの人々も多いが、160~170センチの人々も多く、時には160センチ以下ぐらいの人もある。一般にイギリス人は北欧人種が主体であるとの印象を受け、他のヨーロッパ諸国の人々よりも内向的で生真面目な感じであ

る。

「各人が独立した個人として、自己の責任において考え、行動する」というのがイギリス人の根本的な行き方ではないかと思われる。社会に受け入れられない行動をすれば、寛容に受け入れられる事はなく、それ相当の反応を期待しなければならない。従って親が子供を躾けるのも、社会に受け入れられるように、との考えからであって、エチケットの本にこう書いてあるから、そう教え込む、というのではないように思われる。

11 日本への関心

陶器類には日本のものと紛うものも少なくない。電燈の傘に紙製で提灯の形をした物も使用され、又ぞうりで出歩く人もよく見かけられる。簡素なデザインの家具、少ない装飾、多目的に使える部屋や、家の設計に組込まれた押入的な物入れ等、従来のヨーロッパ式とは違ったやり方も見られる。日本についてのテレビ放送も多いらしく、日本についてかなり現代的で正確な知識を持っている人もある。広告の中に人目を引く目的で日本語が用いられているのも見た。しかし社会一般には日本の影響と言える程の物はよほど注意深く探さなければ見あたらないように思う。

12 言語

発音、綴字等イギリス英語である事は勿論である。近年の傾向として [ou] が [əu] と発音されている。

一般に外国語の使用は少ないが、観光都市である York の駅の出口には *Sortie, Ausgang* とフランス語、ドイツ語の表示があり、又日本人客の多い商店に日本語の広告の見られる所もあった。又地図やパンフレットには各国語のものが発行されている。

外国人としてある国語をしゃべる場合には、あまりにくだけた俗な表現より、一步後退したきちんとした表現がちょうどよいと言われるが、日本人としては教科書で習う通りの表現（ただし文章の表現でなく）を正確に用いて行けば、相手から好感を持って受け入れられると思う。「日常的」ということが「俗っぽい」ということと混同されがちだが、どんな表現が好ましいかは外国人が日本語をしゃべる場合を考えて見ればわかる。

又日本人としては言語の能力と同時に次の点をもっと留意したい。

- 1 言わんとする事柄をあいまいでなく、明確に、把握して表現する事。
- 2 思考と反応の速度を高める事。思考を簡潔かつ論理的に、さっと整理して表現する事。
- 3 Yes と No を明確にし、自分の意志や立場をあいまいにしない一方、相手の意志や立場を明確に理解するようにする事。
- 4 心理的、風物的な面でももっと知識を持って、ふさわしい反応をする事。例えば英語が上手だとほめられたら照れくさそうにして no, no と言うのではなく Thank you. と言って相手に感謝を示す事等。
- 5 言語もさる事ながら会話そのものに上達する事。例えば相手の話は最後までよく聞く、話題を急に変えたりしない等。
- 6 文法に合ってさえいればよい、というのでなく、敬語的表現をはじめ対人関係をスムーズにする表現を身につける事。

イギリス以外の国々で最も英語の通ずるのはオランダ、デンマークで、この国ではどんな人に英語で話しかけても正しい発音で答えてくれた。

大きなホテルでは全部英語を用い、空港では英、仏、独語が掲示され、職員は英語も用い

る。従って英語だけ知っていれば、旅行にさしつかえない、と言うのは真実であるし、外国人に対しては英語で話すというのがどの国にも見られる事である。しかし、オランダ、デンマークのような国は別として、やはり現地の言葉を知っていた方が便利であり行動の容易さが生まれて来る事は否定出来ない。又片言でもなんとかやれる、というのも真実であるが、これでは最低限の必要しか満たされない場合が多い。

一般に英米人以外の英語は各国語のなまりの強いもので、それを皆平気でしゃべっているが英米人はそれをちゃんと理解する。一般に日本人は言葉の文法上の正確さに潔癖すぎるためうまく話せないという声を聞く。しかし5の表現が出来るためには日頃10の練習をつんでいなければならないわけだから、「文法など気にしないで話せ」と言う事は日頃文法や発音をないがしろにしてもよい、という事にはならないと思われる。

このような問題点をさぐり、それに対し有効な指導をする事が今後の問題であろう。